

短 報

国際保健協力看護・助産人材の継続的確保に関する研究

—国際看護・助産専門職キャリアパスモデル開発—

(第1報：ワークショップ報告)

長松 康子¹⁾ 田代 順子¹⁾ 小黒 道子²⁾ 眞鍋裕紀子³⁾

Developing Recruitment System of Global Health Nursing and Midwifery Experts: Developing a Career Pass Model for Global Health Nursing and Midwifery Experts —Report of Workshop—

Yasuko NAGAMATSU, RN, PHN, MPH¹⁾ Junko TASHIRO, RN, MW, PHN, MA, PhD¹⁾
Michiko OGURO, RN, CNM, PhD²⁾ Yukiko MANABE, RN, MN³⁾

[Abstract]

A workshop was held as part of a research project titled the Developing recruitment system of global health nursing and midwifery experts: Developing a career pass model for global health nursing and midwifery experts- that is supported by the Grant of National Center for Global Health and Medicine. The aim of this research project is to have nurses with experience overseas return to Japan and help develop a career path model for international nurses and midwives to improve the current difficulties in continuing a career in international nursing.

Professors teaching international nursing in Japanese graduate schools report that it is difficult to continue a real career in cooperation activities after completing one's master's degree program; and compared with people from other developed nations it is hard for Japanese nurses and midwives to register with international organizations. From the experience of those present who are active both domestically and overseas, all agreed with the observation that the ways of pursuing international nursing and midwife careers in Japan are varied; what is desperately needed is the formation of a career path for people who were involved in cooperation activities overseas so that we can ensure that there are international nurses and midwives on an ongoing basis.

[Key words] international cooperation, nursing midwife, career pass

[要 旨]

国際医療協力開発研究助成事業「国際保健協力看護・助産人材の継続的確保に関する研究—国際看護・助産専門職キャリアパスモデル開発—」の一環として、ワークショップを開催した。本研究プロジェクトは、海外で協力活動を経験した看護職が、帰国したのちに、国際看護・助産の分野でのキャリアを継続す

1) 聖路加看護大学 国際看護学, WHO看護開発協力センター St. Luke's College of Nursing, International Nursing, WHO Collaborating Center
2) 聖路加看護大学 母性看護・助産学, WHO看護開発協力センター St. Luke's College of Nursing, Maternal Infant Nursing and Midwifery WHO Collaborating Center
3) 聖路加看護大学 小児看護学, WHO看護開発協力センター St. Luke's College of Nursing, Child Nursing, WHO Collaborating Center
2010年10月28日 受理

ることが難しい現状を改善するため、国際看護・助産専門職キャリアパスモデルを開発することを目的としている。

日本の大学院で国際看護教育を行っている教員から、修士修了後に国際協力活動をキャリアとして継続する困難な現状、他の先進国出身者に比較して、日本人看護・助産人材は国際機関登用が難しいことなどが報告された。また国内外で活躍する出席者の経験から、わが国の国際看護・助産のキャリアの積み方は様々で、今後継続的な国際看護・助産人材を確保するには海外での協力活動を活かした人材のキャリアパスの形成が急務だとの見解で一致した。

〔キーワード〕 国際協力, 看護, 助産, キャリアパス

I. はじめに

看護職は1960年代より国際保健分野の協力活動に関わり、ヘルスワーカーの中でも最も多くのワーカーを輩出することで重要な役割を果たしてきた¹⁾。独立行政法人国際協力機構（JICA）によって1965年に創設された青年海外協力隊が海外に送り出した看護・保健・助産職は2,000名を超え、その後専門家として長く貢献する者もある²⁾。2000年以降には、国際看護・助産における人材育成と供給のために多くの大学院修士課程で国際看護学・助産学のコースが開設され³⁾、修了生が海外で協力活動の経験を積んできた。JICA³⁾は、国際協力に必要な能力として、専門能力、総合マネジメント力、問題発見・調査分析力、コミュニケーション力、援助関連知識・経験、地域関連知識・経験の6つを挙げている。このような能力は、短期に習得されるものではない。林ら⁴⁾は、国際看護・助産活動に関わる看護職は、プライマリ・ヘルスケアなどの国際保健の基礎知識、異文化経験などを学部で学んだ後、看護実践経験で専門性形成と看護観を確立して、修士課程で国際協力理論や相手国のシステムやニーズの把握に必要な技能を習得したのち、海外での協力活動に参加することで資金獲得からプロジェクト評価に至る一連の高次能力獲得に至るとしている。国際看護・助産には、看護の実践能力だけでなく、語学、資金マネジメントや異文化理解などの多様な能力が求められることから、優れた人材育成は、様々な協力活動経験を通して、これまでの経験を新たな協力活動に活かしながら、さらに次のステップの能力を獲得するという積み重ねによって培われるものと考えられる。しかしながら、青年海外協力隊やNGO活動に参加した看護職が、協力活動を終えて帰国した場合、その経験を活かした業務に就けないのが現状である。平野⁵⁾は、海外で国際看護・助産協力の経験を積んだ看護職は多様な能力を開発したにもかかわらず、病院看護部で「昇進」してもとの業務に復職すると報告した。国際保健協力活動において看護職が求められ、多くの看護職が従事しているにもかかわらず、その後のキャリア継続やさらなる専門性につな

る機会が少ないのは大きな障害である。

聖路加看護大学プライマリ・ヘルスケア WHO 看護開発協力センターでは、わが国の国際看護・助産人材開発の研究に取り組んできた。2008～2009年には国際医療協力研究委託費の助成を受け、国際看護・助産コンソーシアムを設立し、大学院における国際看護・助産教育のコアカリキュラムについて検討した（20指定5）。2010年から2011年度は、国際医療研究開発費助成を受けた「我が国の国際保健協力人材の継続的確保に関する研究（主任研究者：仲佐保氏）」の分担班として、「国際保健協力看護・助産人材の継続的確保に関する研究：国際看護・助産専門職キャリアパスモデル開発」を行う。今回、研究を開始するにあたって、研究の一環として、海外の国際保健看護のエキスパートを招聘し、国内のコンソーシアムメンバーからの講演を基にワークショップを開催したので報告する。

II. 「国際看護学・助産学修了生のキャリア開発とキャリアパスワークショップ」の概要

1. ワークショップの目的

国際看護・助産コンソーシアムのメンバーを中心に、国際看護・助産の大学院教育を修了した看護職のその後のキャリア開発の現状を共有し、継続的国際看護・助産人材のキャリア開発研究の方向性を検討することを目的とした。

2. 開催場所と日時

平成22年8月28日（土）に聖路加看護大学にて開催された。

3. ワークショップの内容

災害看護における国際援助を専門とする Richard Garfield 氏（コロンビア大学教授、WHO コラボレイティングセンター所長）が2010年1月のハイチ地震後の国際看護援助活動の事例について講演を行った。続くワークショップでは、森淑江氏による「わが国の国際看護・

助産人材のキャリア開発—JICA 青年海外協力隊事務局技術顧問の立場から—, 柳澤理子氏による「看護職の帰国後のキャリア開発」について発言を行ったのち, 出席者がそれぞれ海外での活動経験とその後のキャリアを共有し, 全員で討議を行った。

Ⅲ. ハイチ地震後の看護援助にみる国際看護・助産活動

2010年1月に発生したハイチ地震では20万人以上が死亡し300万人以上が被害を受けた。被害が大きかった理由として, 人口1,000万人の首都チリで発生したこと, ハイチが非常に貧しい国であること, 国の統治力が低いことなどが挙げられる。あとの2つは災害の要因でなく, 国の要因である。隣のドミニカ共和国での被害が少なかったことが示すように, 災害が起こっても対応能力があれば人道危機とはならないのである。地震によって, もともと非常に貧しく, 政府機能の弱かったハイチはさらに危機的な健康問題に曝された。もともと子どもの半数以上が医師・看護師にかかったことがなく, 近代医療へのアクセスが悪かった。避難所では子どもの急性呼吸器疾患と下痢が多発した。これらの問題に対しては, 少ない資金で看護師が公衆衛生活動を行うことで大きな効果を上げることができる。地震後に各国から派遣された救援隊は人々の命を救ったが, その数は全体の死者のごく一部である。救援にかかった費用は莫大で1人の救命に100万ドルの資金が使われたとの試算がある。それに比べ, 看護師による公衆衛生活動はそれよりずっと安価に多数の命を救うことが可能である。現在, 既存の看護学校10校を支援すべくアメリカの看護大学15校とのプロジェクトが進行中である。教科書の寄与やeラーニングは費用対効果が大きい。皮肉なことにハイチは地震によって, これまで得るすべもなかった多額の資金供与を得た。これらの資金を, 人々の健康のために獲得する能力も求められる。国際看護・助産のプロフェッショナルとして開発途上国の人々の健康に寄与するためには, 現地の人々と関係を構築し, 今ある資源を使って最も効果的な健康に寄与する方法を考え, 必要な資源を得られるよう声を上げることが求められる。

Ⅳ. 看護職における国際協力活動後のキャリア開発における困難

1. 青年海外協力隊の看護隊員の帰国後のキャリア開発—JICA 青年海外協力隊事務局技術顧問の立場から—森淑江氏

看護隊員の多くが進学し, その後に国際協力活動に携わっている。帰国直後に国際協力を継続しない主な理由

は, 国際協力関係の仕事の多くが大学あるいは修士以上の資格を要するため, 国際協力活動で感じた知識や技術不足について学びたいと考えることによると考えられる。修士修了後は, 博士課程進学, 教員となる, ジュニア専門員, 専門家として派遣される者が多い。国際協力における看護職のキャリア継続を困難とする要因として, 就労契約が長くて5年で身分が安定しない, 看護職が関わっている案件が少ない, 語学が不十分などである。国際看護・助産協力人材のキャリア開発には実践力や国際協力経験が必要である。青年海外協力隊の経験は, 国際協力の経験だけではなく, 語学力も得られるが, 一方で国際協力で用いられる技術移転手法, 調査手法, 評価方法などの知識が弱く, 強化の必要がある。

2. 看護職の帰国後のキャリア開発 柳澤理子氏

Hall⁹⁾によればキャリアとは, 「人の生涯にわたって仕事(work)に関する知識や活動に関連した, 個人的に知覚された態度と行動の連鎖」とした。つまりどんなキャリアを望むかは, 個人がどんな仕事をしていきたいかと考えるかによる。しかるに, キャリアパスを考える際には, 自分のキャリアのゴールをどこへ持って行くかを考え, それを達成するためにどんな経験が必要かを考えることが必要となる。国際看護・助産のキャリアには, 様々な形態があるので, 国際機関か NGO か, 海外滞在か短期派遣か, 自分自身が協力活動を行うか, 教育かなど, 自分の望むキャリアについてイメージを持つことが重要である。また, キャリアをアップしたいのか, チェンジしたいのかという視点も持つ必要がある。

国際看護・助産の専門職として働きたい場合, 雇用機関によってリクルート方法はさまざまだが, 国際機関はホームページによる公募が多く, 外国人応募者との競合である。いずれにせよ, 国際看護・助産には基本となる看護経験が不可欠で, その後修士課程を修了することが望ましい。

3. 国際看護・助産のキャリアパス開発のニーズ

国際看護・助産の大学教育にあたる教員や, 自ら国際看護協力を従事した経験を持つ参加者より, 諸外国の看護職が国際機関や国際 NGO でキャリアを継続させているのに比較して, わが国の看護職の帰国後のキャリア継続は困難であるという発言があった。帰国後のキャリア継続の難しさは認識が一致した。加えて, 多くの参加者が帰国後それぞれにキャリア開発の道を模索してきた経験があり, 看護・助産職はキャリアチェンジの中で海外での協力経験を活かしていることも報告された。修士課程を修了し海外経験を持つ若手が, より広いキャリアの機会を得られるよう, キャリアパス開発のニーズが示唆された。

Career Change & Up	国際協働実践				教 育	研 究
	施設内	地 域	教 育	行政・管理		
エキスパート (Expert)						
中 堅 (Proficient)						
若 手 (院 生)						

図1 国際保健看護・助産職キャリア開発の枠組み



写真1 ワークショップ参加者



写真2 Dr. Garfield による講演「ハイチ地震後の国際看護援助」

V. ワークショップからの学びから研究への示唆

本ワークショップを通して、キャリア開発の定義を確認し、研究の枠組みを明確にすることができた。定義に関して、米国の The National Career Development Association のキャリア開発の定義⁹⁾ (NCDA, 2003) やその他の定義に準拠し、キャリア開発を、「一定組織内のキャリア開発の側面だけでなく、個人の生涯にわたる国際保健領域での仕事の積み上げあるいは連鎖であり、その仕事の積み上げは多くの要因により影響を受けるもの」とした。研究の枠組みは、国際保健看護・助産領域のキャリア開発はキャリアアップとキャリアチェンジの方向性が考えられ、図1のような枠組みとした。研究の焦点を、国際看護学・助産学の修士課程を修了し、長期海外での国際協力を、大学院課程の前あるいは後に終了した段階の国際保健看護・助産職で、国際保健ですでに使われている中堅国際看護・助産人材と定義し、中堅以上の学識と経験を持つ国際保健看護・助産職をエキスパートとした。今後、この枠組みで、中堅の国際看護・助産職のキャリア開発ニーズに基づくキャリアパス開発を進めてゆく。

謝 辞

本稿を執筆するにあたり、「国際看護学・助産学修士生のキャリア開発とキャリアパスワークショップ」においてご講演をいただきました Dr. Richard Garfield, 森淑江氏, 柳澤理子氏に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 田村やよひ他. (2009). 国際看護学—看護の統合と実践<3>. 東京：メヂカルフレンド社.
- 2) 森 淑江. (2000). 国際看護協力の現状と展望. 北関東医学, 50(5), 489.
- 3) 独立行政法人国際協力機構. 国際協力人材に求められる6つの資質や能力. JICA—国際協力機構. <http://partner.jica.go.jp/shigoto/6abi.html>. [2010.09.14]
- 4) 林直子, 田代順子, 菱沼典子他. (2008). 国際看護コラボレーターに必要な能力モデル構築と教育プログラムの開発. 国際保健医療, 23(1), 23—31.
- 5) 田代順子他. (2010). 国際医療協力研究委託費 20 指定 5「大学院修士課程のウィメンズヘルス・助産・看護人材開発協力学」のカリキュラム. 教材開発研究,

2008－2009 年度報告書.

- 6) 平野美樹子. (2006). 人材開発としての国際救援派遣—派遣によって開発が期待される能力と帰国後の活用—. 日本看護科学学会学術集会講演集 26 回, 151.
- 7) Hall D. (2002) . Careers In and Out of Organizations,

Thousand Oaks. California.12.

- 8) The National Career Development Association (2003). Career Development: A Policy Statement of the National Career Development Association Board of Directors. <http://www.ncda.org/pdf/Policy.pdf>. [2010.10.26]